

教育資料室だより

No.32 令和8年(2026). 2. 20

発行 桐生市教育資料室

桐生市小曾根町3-30(桐生市教育センター内)

電話 0277(46)6191

桐生の人物 <その5>

ゆ ら なり しげ
由良成繁

1506[永正8]?
~1578[天正6]

ゆ ら くに しげ
由良国繁

1550[天文19]
~1611[慶長16]

戦国時代末期、後桐生氏(教育資料室だよりNo.28)が滅亡した後、桐生地域を治めたのが由良氏です。由良氏は元は横瀬を名乗り、現太田市の金山城主岩松氏の家臣でしたが、次第に実権を握り、ついには岩松氏を隠居させ、事実上の金山城主となります。当時、上野国は

上杉・武田・北条という有力戦国大名が覇を競う草刈場となっていました。その中をたくみに生き抜き東上野に勢力基盤を固めていきます。由良(清和源氏新田一族相伝の地)を名乗るのは成繁からです。

元龜4年(天正元年・1573)に柄杓山城を攻略した成繁は、部下の藤生紀伊守と金谷因幡守を配し、後桐生氏に従っていた武士団を遠ざけ監視する態勢を整えます。翌年、金山城を嫡子国繁に譲り、桐生領に入った成繁は、桐生氏の菩提寺である西方寺を見舞い、合戦で荒れた寺社へ修繕・保護の手を差し伸べて、人心を落ち着かせたと伝えられています。

その後、菩提寺として桐生山鳳仙寺(梅田町2丁目)を建立します。鳳仙寺は多くの伽藍を有した格式の高い寺で、常に数十名の学僧が修行に励んだといひ、元禄元年(1688)には、曹洞宗の常法幢※1別格地に指定されています。



成繁は続けて天正3年(1575)に、新田郡岩松村(旧尾島町)にあった新田氏ゆかりの青蓮寺を久保村六反ヶ谷(桐生市西久方町)へ移築します。青蓮寺は桐生で唯一の時宗※2の寺です。因みに、本尊の善光寺三尊物は、国の重要文化財に指定されています。さらに普門寺(曹洞宗)を世良田(現太田市)から菱の中里(菱町4丁目)へ移築しています。

成繁は桐生郷の新しい領主として、領地経営に当たり領民の信頼を得て、治世6年目に当たる天正6年(1578)に没しました。墓地は鳳仙寺にあります。



この後、桐生を治めたのは、既に家督を継いでいた嫡子国繁です。母は館林城主・赤井刑部小輔重秀の娘で、俗に(確かな史料がないため)赤井輝子といひ、晩年は妙印尼と呼ばれます。国繁には、足利長尾氏に養子に入った顕長という弟がおり、永禄12年(1569)に長尾家の家督を継ぎ足利・館林城主となっています。

国繁も、金山城を拠点に戦乱の世を巧みに渡り、上杉謙信没後には、深沢(旧黒保根村)五蘭田(旧東村)女淵(旧粕川村)など、上杉氏に奪われていた領地を奪い返していきます。その裏には武田氏と手を組んだり、離れたりしていた北条氏の力が働いていたと思われます。

ところが天正11年(1583)、北条高広きたじょうたかひろ(この頃は上杉方)が籠もる厩橋城(前橋城)を攻略した北条氏直に戦勝祝いに出向いた国繁・顕長兄弟は、金山城・館林城を北条氏へ明け渡すことを渋ったため(県史通史編3)小田原城に連行されてしまいます。妙印尼を中心に家臣団は反北条勢力とともに必死に抵抗しましたが挽回できず、城は北条氏の手に入り、国繁は桐生へ、顕長は足利へ移ります。

桐生に来た国繁は、由良氏の菩提寺である金竜寺を西方寺の西へ移築する計画を立てます。しかし、天正17年(1589)豊臣秀吉による小田原征伐開始により、国繁は小田原城籠城を命じられ、移築計画は頓挫し、完成は定かではありません。

国繁が北条方についた後、母妙印尼は、家名を守るために豊臣方に加勢し、孫の貞繁・繁詮を助けて松井田城を攻撃し戦功をあげます。その甲斐あって、国繁は断罪を免れ、由良家は常陸牛久(茨城県牛久市)に五千石の領地をもらい転封されます。この結果、後桐生氏から二百数十年にわたって武威を誇っていた桐生柄杓山城は、ついに廃城となるのです。

国繁は関ヶ原の戦いで徳川に味方して加増され、慶長16年(1611)に没します。妙印尼は牛久に「得月亭」という庵を建てて閑居し、文禄3年(1594)に天寿を全うしました。

※1 常法幢とは、公儀から勅許された出世道場のこと
別格地とは本山に次ぐ格式のこと

※2 開祖は鎌倉時代の僧、一遍 踊念仏で有名
一日六回決まった時間に念仏を唱えたことから
六時念仏宗、時衆と呼ばれていた

☆参考『ふるさと桐生のあゆみ』『明日へ伝えたい桐生の人と心(上巻)』『桐生市史(上巻)(別巻)』『桐生の歴史-桐生文化史談会編』『群馬県史』『桐生市HP及びキッズページ』『鳳仙寺HP』